

風の便り (第82号)

発行日：平成18年10月
発行者：「風の便り」編集委員会

●●●●● Active Senior ●●●●●

熟年の危機と生涯学習の処方箋

(来年に出版を予定している著書の前書きと最終章のつもりで執筆しています。表記・文体がバラバラなのは当面お許しいただきたい。)

● 1 ● 「老いていない」研究者の「老い」の研究

かつて、熟年の危機を論じた際に参考にした多くの文献が余り役に立たなかった実感があります。その最大の理由は、いまだ「老い」を知らぬ現役世代の研究者がおのれの「想像力」に頼って分析や提案をしているからだと感じました。この分野の研究は、現役若手研究者だけに任せておくわけには行かないのです。

筆者が若かった頃と同じように、彼らはまだ「反応速度」の衰えも、平衡感覚の揺らぎも、「あれ、あれ」を繰返し、頻発する「物忘れ」も、硬直化する筋肉と関節の悲哀も知らないでしょう。「入れ歯」を入れたことはなく、息が上がって「駅の階段を駆け上がれなくなった」現実も知らないのです。要は、「老い」を知ら

ない研究者が「老い」の問題を書いているのです。バリアフリーも、大きな活字も実感としてその必要性を感じてはいないのです。2007年問題は日本の社会保障を直撃し、人口構成上圧倒的な重要性を持つ「団塊」の世代を直撃します。戦後最大の定年者群が現役時代の想像を絶するダブルパンチを食らうのです。右のパンチは「定年」で社会から「無用者」の宣告を受け、左のパンチは「老い」で、心身が加速的に「衰弱と死」に向かって降下を始めます。この悲哀は若さを誇り、働き盛りを謳歌する元気な人々には中々分かってはもらえないでしょう。「人の痛いのなら3年でも辛抱できる」国ですから。

● 2 ● 先輩世代の無惨な衰え

私の研究のヒントは最も「タフ」であった筈の先輩世代の無惨な衰えにあります。筆者より10年先輩の世代は、いまだ貧しかった日本に育ちました。耐えるべき困難は日常茶飯の中にありました。更にこの世代は戦争の欠乏に耐え、その悲惨をぐぐりました。な

にも無くなった戦後の瓦礫の中から今日の日本社会を創り上げました。先輩世代は我々はもとより、団塊の世代に比べても、体力も、耐性も遥かに「タフ」で、働き者で、粗衣粗食に耐えた世代でした。

●●●●● 目次 ●●●●●

- 1 Active Senior 熟年の危機と生涯学習の処方箋 P1
- 2 学社「連携」の「片務性」、学社「融合」の空論 P7
- 3 保護者は何を見たか？夏学期「豊津寺子屋」保護者調査の集計と分析 P9
- 4 第71回フォーラムレポート おそらくは「日本一のコミュニティ小学校」福岡県須恵町 P13
- 5 Message To and From P14
- 6 編集後記 P15

しかし、その先輩世代ですら、定年後は見るも無惨に「おいぼれ」しました。「タフな世代」が「定年」と「老い」のダブルパンチを受けた時、国も個人もその対処法を誤りました。その結果はまさに今われわれが見ての通りです。例外の方々はそこそこおられますが、総体として、「タフな世代」は引退後にその体力と耐性を十分に持ちこたえることはできなかつたのです。その何よりの証拠が現在の医療費の破綻であり、介護費の大赤字でしょう。定年後の「生涯時間」が20年にも達した現在、加齢がもたらす「衰弱と死」に向かって緩やかにソフトランディングを全うすることがいかに難しいか、先輩世代が身を持って実証してくれたのです。働いている間はタフで、がまん強く粗衣粗食に耐えた彼らが、職業を離れると同時に老い、衰えたということは熟年の活力が如何に「社会」や「労働」ということと密接に関わっているかを暗示して余りあると考えるべきでしょう。その点では高齢者大学も老人憩いの家の施策も大いに間違っていたのです。熟年の活力にとって「はたらく」ということの意味はどこにあったのか？現役世代の労働観には「義務や苦労や生活の手段」など労働に伴う「負」の部分のみを強調したきらいはなかったでしょうか？それゆえに、老後の答が「安楽」や「楽しみ」に限定されたのではないのでしょうか？

定年後、「労働」に代わる「活動」はどうあれまいのか？「労働」が「生産活動」であり、また「サービス活動」であったとすれば、定年後に社会と関わるにはどうすればいいのか？活動には何をせばいいのか？定年後の活動は社会貢献や社会的生産やサー

ビスのシステムを通じた人間関係に関わらなくていいのか？それが筆者の研究課題です。熟年の活力を維持する当面の研究仮説の概要を一言で表現すれば「読み、書き、体操、ボランティア」になります。老後の安楽を拒否し、余生は「悠々自適」という人生論の蒙昧を排して、心身に絶えざる「負荷」をかけ、人生の蓄積を活かした社会貢献の努力の継続こそが熟年の活力源です。もちろん、それ以外に現行社会保障制度の破綻を回避する根本方策が存在しないことも自明のことでしょう。文部科学省の高齢者のための生涯学習施策も、厚生労働省の老人福祉施策も短期的には、確かにやらないよりはやった方がいいという場面もあるでしょう。趣味も、教養も、軽スポーツもその実行の時点で人々が元気になることは現象的に明らかであります。しかし、果して、高齢者人口のほんの少数を占めるリピーター学習者のために、一時しのぎの「安楽プログラム」を税金で実施したことにとれほどの意義があったのでしょうか？「安楽プログラム」の大半は、長期的に見れば、「タフな世代」ですらをも惰弱に導き、今日の高齢者福祉の危機を招いた元凶なのです。これらの施策に注ぎ込んだ公金を高齢者のボランティア活動や社会貢献に限定して活用すれば、生涯学習の風土を変え、日本人の定年後の行動様式を変え、相互支援のコミュニティ交流を創り出す上でどれほどの効果があったか、返す返すも残念に思えてなりません。

● 3 ● 熟年期の危機

熟年期には、人々のライフサイクルに関わる心身の発達課題の上でも、職業や実生活に関わる社会的課題の上でも様々な人生の危険要因が待ち構えています。それらは基本的に心身の機能の衰退であり、生活の変化に対する「適応」力の低下などの課題であると考えられます。それゆえ、加齢とともにやってくる危険要因についての知識と準備があれば、ある程度問題は回避することが十分可能なのです。しかし、高齢社会への突入が叫ばれながら、労働や福祉の分野はもとより、生涯学習や生涯スポーツの分野ですら向老期に向けての知識も対応も極めて不十分でした。結果的に人々の準備対応はほとんど出来ていないというのが実情です。寝たきり老人の防止策から高齢者大学の学習成果の社会還元まで行政は人々の向老期準備を支援する施策に次々と失敗を重ねました。

「準備不十分」の最大の理由は助言を行なうべき研究者も、実践の指導を行うべき指導者も、その大部分が「老い」を経験したことのない現役の若い世代だからであろうと思います。「老いを知らない」現役世代の立案能力の限界と言わざるを得ないでしょう。自分自らの若い時代を振り返っても、「若さ」が「老い」を理解することは難しいことです。「個体」の制約を受けている人間が、自分では「体験したこと」のないことをどうやったら理解できるでしょうか。ひとり一人が別々に分離されて存在しているという「人間の個性」はいつも「共感」や「理解」を拒絶します。世代間の認識格差、感情格差、機能格差はその典型です。他者の痛みを分つことはできず、人の思いをわが思いにすることは至難のわざなのです。それゆえ、日本人は昔から、「他者の痛いのなら3年でも辛抱できる」と言ってきたのです。

若い世代には、「入れ歯の不自由」は分らないのです。膝が痛いのも、腰が痛いのも、体力、気力が衰えるのも、若い人々の想像を越えているのです。未だ、親になったこともない人々に、子どもが巣立って親だけが取り残される状況の淋しさがどうして実感できるでしょうか。定年によって労働の季節が終ることは、見方を変えれば、熟年世代にとって、社会に必要とされない時間の始まりです。熟年期はこうした諸々のことが同時に起るのです。

「老い」に伴う発達上の様々な変化への対応を体験したことのない現役世代に十分な理解を求めることは無理というものでしょう。また、彼らが十分に理解しないからと言って、その「鈍さ」を責めることもできないでしょう。彼らもやがて、次の世代から理解されず、順送りに「老い」の悲哀をなめることになるのです。人間にとって体験したことのないものを理解することは至難のことなのです。「存在の個性」は頑固です。その頑固さ故に、人間は世界中に悲劇や不公平が存在していても平気で暮らすことができるのです。アイマスクをしたり、車椅子の体験をしても、その程度の事で障害者の状況が理解できるなどと想定する方が浅薄であることは言うまでもありません。人間は自分から切り離された他者の心身の状況を共有することは不可能なのです。それが人間の認識の限界であり、ひとり生まれ、そして一人で死んで行く人間の宿命

でもあります。それゆえ、「老い」もまたそれが現実のものとなるまで人々が実感できないのは当然なのです。いまだ老いを知らない現役の指導や助言の多くが役に立たないのはそのためでしょう。

筆者もまた自らが「老い」の領域に踏みこんではじめて存在についても、老いについても「存在の個性」をより一層実感するようになりました。眼鏡は3つも持っています。部分入れ歯の世話にもなりはじめました。腰も、膝もなだめなだめ使っています。子ども達はすでに遠く家を去りました。我が家は文字どおり親鳥だけが取り残された「エンプティ・ネスト」です。パリアフリーはもとより、階段には手摺を付けました。若い頃には想像も出来ない条件下で暮らしています。1日、2日でも使わなければ身体のあちこちが固くなり、交流を怠れば、時に言葉に詰まり、物忘れが起り、人と会うこと自体が億劫になります。読み書きを続けることは難儀ですが、止めれば立ち所に脳細胞の死滅が始まることでしょう。ボケまでの距離はほんのすこしなのです。それゆえ、老いの身にはますます生涯学習も生涯スポーツも必需品になったのです。昨年、まちの自治会から「紅白まんじゅう」が届きました。今年は初めて熟年のための書物を書く資格が整ったと実感しています。今度の著書はこれから向老期に向かう人々のための未だ見ぬ人生の風景についての理論的地図でありたいと切に願っています。

● 4 ● あとがき： Active Senior の条件

「三屋清左衛門残日録」(藤沢周平、文春文庫)の教訓-高齢者の覚悟と生涯学習の意義

上記の書は職を辞して以来、最も敬愛する小説のひとつである。文学者藤沢周平の勤は熟年者の生涯学習の原理と処方箋を見事に見抜いている。その意味では城山三郎の「毎日が日曜日」に肩を並べる。清左衛門が自得する老後の心身の課題やその対処

法には大いに共感し、学ぶところが実に多い。筆者も「残日録」の年令に達した。紹介と分析をもって「あとがき」に代えたい。

● 5 ● 「異様な空白感」-「突然に腸を掴まれるようなさびしさ」

清左衛門は君主を補佐する江戸屋敷詰めの側用人という活躍の舞台から隠居した。引きこもった清左衛門は、生まれ故郷の夜更けにひとり目覚めている。清左衛門はすでに十分に仕事をした。仕えた藩主も亡くなった今、彼は隠居を切望していた。悠々自適の晩年を過ごしたいと心から望んでいた。悠々自適の暮らしとは、「たとえば城下周辺の土地を心行くまで散策するというようなことだった」。「散策をかねて、たま

には浅い丘に入って鳥を刺したり、小川で魚を釣ったりするのもいいだろう。記憶にあるばかりで、久しく見る機会もなかった白い野ばらが咲き乱れている川べりの道を思い浮かべると、清左衛門の胸は小さく時めいた」(p.13)。

ところが、隠居の実態はおおいに違ったのである。隠居をすることは「世の中から一歩しりぞくだけ」であると軽く考えていたが、全くそうではなかった。隠居は、

「それまでの暮らしの習慣のすべてを変えることだった」のである。まず一日の計画を立てることがなくなる。終日ひとりの客も来ない。清左衛門が隠居したというより、「世間の方が、清左衛門を隔ててしまった」(p.14)のである。すでに昔に戻ることはできない。それは「異様な空白感」である。空白感を埋めるためには、新しい暮らしと習慣で埋めて行くしかない。「うかうかと散歩に日を過ごすわけにはいかぬらしい」と、清左衛門は自覚せざるを得ないのである。

「国元の夜は、時刻が五ツ(午後8時)にもなればもう夜更けで、塀の外に行く人の足音や話し声もぱたりとやみ、あとは時折の犬の遠吠えを聞くぐらいになる。」

「夜更けて離れに一人でいると、突然に腸を掴まれるようなさびしさに襲われることが、二度、三度とあ

った。」「そういう時は自分が、くらい野中にただ一本でたっている木であるかのように思いなされたのであった。」(p.12)

退職を経験したものはどこかで清左衛門と同じ経験をしているであろう。労働の季節を終り、仕事によって繋がっていた社会との関係が切れた時、われわれは往々にして「自分の定義」ができなくなるのである。「世間の方が隔てる」とは社会がおのれを必要としない、ということである。「定義」のできない己はすでに人生の意味付けができない「無用の存在」である。定年者の孤独はここにある。「生き甲斐喪失症候群」や「定年うつ病」の原因もおそらくは「異様な空白」であり、「突然に腸を掴まれるようなさびしさ」にあるであろう。

● 6 ● 他者の目「おのれを世の無用人と思う」

隠居後、清左衛門は日記を書くことを思い立つ。「お日記でございますか」。気がついて、嫁が問う。「うむ、ぼんやりしておっても仕方がないからの。日記でも書こうかと思いついた」。「でも、残日録というのはいかがでしょうね。」「いま少しおにぎやかなお名前でもよかったですのでは、とおもいますが」。「なに、心配ない。」「『日残リテ暮ルルニ未ダ遠シ』の意味でな」と答える(p.16~17)。しかし、息子の嫁は彼の「空白感」を見逃さない。老いて日記という名の「自分史」を書き始めるのは己の終末を予感するからであろう。「残日録」は果して誰のために書かれるのか。「オーラ」というか、立ち上る「気」というか、胸に空白をかかえた人間は「自家発電能力」を失うのである。清左衛門の気に入りでもらった嫁は、実家の父親の隠居になぞら

えて、(剣の)無外流の修業の再開(生涯スポーツ)と藩校での学問(生涯学習)、磯釣り(趣味、気晴らし)に打ち込むことなどをさり気なくすすめた。

後に、昔なじみの友人にあった清左衛門は「「隠居はいそがぬ方がいいぞ」、「隠居というのは考えていたようなものではない」、と言った。「おのれを世の無用人と思うわけだ。」「油断ならん」。

清左衛門はやがて少年達の剣の指導を始める。昔なじみの町奉行の非公式な依頼を受けて調査の手伝い(ボランティア)も始める。労働以外の場面を活用して社会に尽さない限り定年者が社会と繋がる方法はない。「無用人」になるかならぬかの分かれ道は江戸も平成も本人の「社会貢献」が鍵である。

● 7 ● 感想の違い_引退世代の断絶

清左衛門は町奉行の依頼で一人の女の危機を救った。仕事を無事になし終えてホットしたふたりは春の花の道無言で歩む。「これで終わったかな」とぼつりと言う。清左衛門は一人の女の人並みの幸せを祝福したつもりだった。現役奉行は別のことを勢いよく言った。誰であろうと「よこしまに我意を通すことは許せぬ」。

「隠居と働き盛りの町奉行とでは、感想にも差が出たな」と清左衛門は思った。現役と引退世代の断絶である。ましてや世代間のコミュニケーションはますます難しい。アメリカに高齢者世代の利益と権利を追求する急進的な「シルバーパンサー」(銀色の豹)が結

成されることも頷けるのである。

高齢者が現役と話が噛み合わないのは世の中を見る視点、感想の違いが広がるからである。現役は仕事の関心が自分の関心である。高齢者は人の世の喜怒哀楽が関心である。たとえそれが「仕事の話」でも、人生の哀歓に関連させて考えざるを得ない。建て前や事実の重要性を忘れたわけではないが、「仕事だけの話」など聞きたくはない、のである。現役と引退世代の感想の違いは如何とも埋め難いのである。

現役の感想は仕事の責任から発する感想である。これに対して、隠居の発想は、人生に人の幸せ以上に大事なことがあったまるか、という感想である。し

かし、世の中は現役を中心に展開する。それが誰でもあろうと個人の引退に関わり無く、社会は極めてドライに、「権力」や「かね」や「法」や「原因と結果」だけを巡って進展する。労働の第1線から引いた以上すでに

高齢者は無力であり、世の中の仕組みに口を出す幕はない。現役世代の引退者への本音も静かに引っ込んで暮らしている、ということであろう。

● 8 ● 晩学の志—「わしもまだ捨てたものではない」

隠居後の「異様な空白感」から立ち直った清左衛門は藩校彰古館に入学を果たす。今で言えば社会人入学ということか。師となる保科笙一郎は清左衛門の「晩学の志」をほめて、「塾生と一緒に講義を聞いてはいかが」と言った。

「経書をかかえて保科塾に通うことになるかと思うと気持ちが若返る感じがするばかりでなく、前途に、宮仕えのころは予想もつかなかった新しい世界が開けてくるような気もしてくる(p.72)」。清左衛門は無外流の道場にも再入門を果たす。初めは息が切れ、まったく動かなかった身体が少しずつ鍛練に馴染んで行く。「いやお若い。身体の動きも、技もです。」「年寄りを

喜ばせようと思って、そんなことを言っておるな。」「いえ、本音です。もう少しでこっちが負けるころでした。」「

「多少は社交辞令が入っているにちがいない」と思っても、高弟にほめられて気分が悪いわけではない。足が弾んで当然というものだった(p.192)。かくして、清左衛門は子どもたちの剣の型のしつけもまかされるようになった。ボランティアという言葉がなかった時代のボランティアである。「わしもまだ、捨てたものではない」と思うことができるようになった。その感想こそが熟年の拠り所である。

● 9 ● 足掻く年齢「生老病死」の終点が見える

清左衛門は成功した昔なじみの”いくじなし”に再会する。昔の意気地なしも、今は、出世も果たし、金も残して隠居し、「妾」の若い女をかこっている。名は惣兵衛という。「今夜はおまえの手料理で一杯やろうと思ってな、友だちを連れて来たのだ」。女はちらと清左衛門を見て、はきとした返事もしないで台所の方に消えた。「幾つだ。まだ、子どもみたいな人じゃないか。」「あれで十九だ。」「少しはうらやましくなったんじゃないのか」。

惣兵衛はしきりに若い妾を自慢した。しかし、娘の方は黙って酌をするだけで、さほど嬉しそうには見えなかった。

惣兵衛は酔っていながらも若い娘の機嫌をとるような口を利いた。「勘定奉行もつとめた男が」と、御馳

走にはなったが、いささか苦々しかった。悪酔いして清左衛門は昔なじみの男の妾宅をでた。

.....はたして.....。「病気で倒れた時、あの若い妾が親身に看護してくれるかどうかは疑問だ」と、清左衛門は思った(p.295)。しかし、惣兵衛も自分も、そういうことで足掻く年齢になったのは確かだと思わざるを得なかった。老いとは「衰弱と死に向かったの降下」である。それ故「バイアグラ」も売れる。「介護予防」体操も盛んになるだろう。それでもやがて「生老病死」の終点は来る。年寄りみんな強がりながら、足掻きながら、未来の暗い一点を見つめているのである。どう理屈を付けようと高齢社会が暗いのはそのためである。

● 10 ● 衰える宿命_戦う老年

清左衛門の幼馴染みの平八が卒中に倒れた。中風は軽いものだったが、しばらくはリハビリも始められぬほどの弱りようだった。元気者のもう一人の幼馴染みの町奉行は、「で、歩いているのか」と尋ねた。「いやまだだ。床の上には起き上がっている。」「そこがあの男のふんぎりの悪いところだて。」「わしならあのへんの堀につかまっても歩く」と言って毒づく。清左衛

門は「貴公のようにはいかんさ。ひとにはそれぞれの流儀がある(p.360)」と倒れた友をかばう。そんなある日、別件の用事を終った清左衛門は思い立って倒れた友の病状を見舞うことにして、早春の道を辿る。

道の遠くに動く人影があった。杖をつきながら、ゆっくりゆっくり動いているのは平八だった。ひと足ごとに、平八の身体は今にも転びそうに傾く。片方の足に、ま

ったく力が入っていないのが見て取れた。身体が傾くと平八は全身の力を太い杖に込める。そしてそろそろと別の足を前に踏み出す。またからだか傾く。辛くて汗ばむような眺めだった。

「そうか、平八。」「いよいよ歩く練習をはじめたか」。

人間はそうあるべきなのだろう。衰えて死が訪れるそのときは、おのれをそれまで生かしたすべてのものに感謝をささげて生を終ればよい。いよいよ死ぬるときまでは、人間は与えられた命をいとおしみ、力を尽くして生き抜かねばならぬ、そのことを平八に教えてもらったと清左衛門はおもった(p.436)。その多くは「精神」と「肉体」の戦いである。それでも「戦える者」はまだ幸せである。先に精神が失われれば、残された肉体は朽ち果てるままに放置されざるを得ない。「クスリ止めますか、それとも人間止めますか？」とい

う麻薬防止の標語の通り、精神の働きを失えば人間は人間でなくなる。認知症の進んだ高齢者の虐待の原因がここにある。

この点に関して、清左衛門はまだ「精神対肉体」の問題を突き詰めてはいない。われわれは清左衛門の精神の幸運を祈るしかない。

「今日の記事には平八のことを書こう」。清左衛門は嫁の里江に「釣り竿を出して来てくれぬか」と頼んだ。里江がくすくす笑った。「今年はお早いお手入れでございますこと」。清左衛門は機嫌よく、もう一言つけ加えた。「平八がやっと歩く練習をはじめたぞ(p.437)」。あらゆる生き甲斐論も、生涯現役のすすめも最後は熟年の覚悟に収斂する。しかも、最後の幕の下し方はいつも人生の秘事である。

● 11 ● Active Senior の条件

過日 NHK スペシャルが「老化に挑む」を放送した。その中で科学者たちが、人間の「脳」と「筋肉」は鍛えることが可能であり、衰えの防止が可能であることをさまざまな実験によって証明していた。事実「脳」の神経細胞が再生される過程も検証された。我が意を得たり、の思いである。人々の定年が「労働からの引退」に留まらず、結果的に、「活動からの引退」にまで至った時、必然的にこれまで使っていた心身の機能は使わなくなる。活動が休眠すれば、身体も、頭も、気も使わない。筋肉であろうと、脳であろうと使わなくなれば必ず衰退する。ルーの法則は免れないのである。結論的に、活動の減速に繋がる「定年」は必然的に「老化」を加速するのである。

高齢社会の医療費や介護費の高騰は単に「老人の増加」に原因があるのではない。「何もしない老人」の増加に主たる原因があるのである。「三屋清左衛門」の晩年の教訓はそこにある。

本書において筆者は、繰返し「読み書き体操ボランティア」の重要性を訴えたが、それは心身の機能の維持と再生の可能性を重視する故である。なかでも最も重要なのはボランティア活動への参加である。ボランティアは「活動」を意味し、「社会との関係」を意味し、「能力の発揮」を意味している。

ボランティアには本人に対する社会の期待や要請が含まれており、それこそが本人の存在の必要性についての社会的定義を意味する。労働と同じく、他者に関わる社会的活動には「気を使う」精神機能も、「読み書き体操」の知的・身体的機能も必ず含まれている。定年後は労働に戻る道はない。それが社会との約束である。唯一、他者に貢献し、社会との契約に

よってその意義を評価される活動はボランティア活動なのである。

人間が社会をつくって以来、われわれの存在感の基本は社会的に決まるようになった。換言すれば、われわれが意義ある日々を生きるためにはわれわれの存在に対する他者の認知が必要になったのである。趣味や娯楽が多くの人にとって空しいのはそこには私的人間関係はあっても、社会の認知が稀薄だからである。ゲートボールやカラオケや踊りや風呂の楽しみだけでも「その日暮らし」はできよう。しかし、多くの方は、それだけでは生き甲斐を持って、未来の自分を生きることはできない。かつて多くの専業主婦達が趣味・教養の講座だけでは満たされなかったように、高齢者もまた満たされる筈はないのである。女性たちが「カルチャー難民」として漂ったように、熟年もまた「ゲートボール難民」になり、「カラオケ難民」になり、税金丸抱えによる「安楽プログラムの難民」として漂っているのである。老人憩いの家から老人学級に至るまで「安楽な余生」のプログラムは税金の無駄であるばかりか、老後の生活がそれだけに偏れば、熟年は定年後の安楽を当然とし、結果的に自らの活力を喪失するのである。仕事熱心にやってきた社会教育や高齢者福祉の担当者にとっては耳を疑う批判であろうが、老人学級も、高齢者大学も、憩いの家も、長期的には「タフな世代」の老いぼれを促進し、彼らの情弱に貢献したのである。

安楽な余生の施策は長期的に本人を衰退させるに留まらない。医療費を高騰させ、介護費を赤字に転落させ、財政上も極めて有害である。楽しく、安楽に暮らせば、熟年に「負荷」はかからない。問題の核

心はそこにある。楽な暮らしは人間の機能を衰退させる。身体も、頭も、精神も衰退させる。高齢者もまた働けるだけ働き、定年後は己の心身の機能を鍛え、ボランティアによって社会に貢献を続けるべきである。国も、自治体も各種の『ボランティア促進法』を整備し、

「高齢者ボランティア事業」を推進し、高齢者の社会的活躍の機会を保障するべきである。それが本人の健康と生き甲斐の秘訣であり、国家の社会保障制度が廻り続ける原理である。

学社「連携」の「片務性」、学社「融合」の空論



1 学社連携の「片務性」

2月に行われる山口県の第2回人づくり地域づくり大会は「学社連携」と「学社融合」を取り上げる。筆者もプログラムの一翼を担うことになっているので事前に問題点を整理しておこうと思いついた。

「学社」の「連携」や「融合」があるかのような前提で議論に入ることは間違いである。「連携」は学校による一方的利用に終始し、「融合」は何度か論じたように空論である。「連携」は言葉の真の意味で「連携」ではなく、「融合」はスローガンだけでその思想を実現したモデルは寡聞にして知らない。

寄生動植物の中には片務的な寄生と双務的な寄生があるという。寄生は寄生する動植物にとって意味があることはもちろんであるが、時には寄生される動植物の側にとっても大いに意義のある場合がある。それを双務的寄生という。この場合は「寄生」というよりはむしろ「共生」と呼ぶべきであろう。「学社連携」論も同様の視点から点検すれば事の本質は当然「双務性」であり、「共生」である。人間社会の連携を問う以上、連携する組織・機関間の関係は「支配」・「依存」・「一方的利用」を「連携」とは呼ばないであろう。「連携」である以上は支援も貢献も双方向でなければならない。したがって、学社連携をいう場合は学校の地域貢献、地域の学校支援を具体的に問わなければならない。学校が社会教育や地域資源の恩恵を受けていることは明らかであるが、学校が地域に貢献している事例は極めて少ない。現状では、学校は、同じ学校の子どもの放課後や休暇中の活動にさえ施設利用の門戸を開こうとはしない。論じられている学社

連携の大部分は「双務性」を欠如し、学校からの地域貢献は皆無に近いのである。



2 「学社融合」の空論

「融合」の問題はすでに何回か論じた。どの辞書にも「融合」の定義が出ている。説明の核心は『異なった「もの」が「溶け合って」「新しいもの」が生まれる』、というものである。それゆえ、どの視点から見ても、「学社融合」というスローガンのもとに新しいものは生まれていない。「新しいもの」とは学校教育機能とコミュニティ教育機能が同時に発揮できるような組織やシステムを生み出すことに外ならない。

かくして、「連携」も「融合」も空文句の誇りを免れないのである。

折しも、次年度から文部科学省と厚生労働省の合意に基づき、少子化防止、育児支援、男女共同参画の推進、教育と福祉の連携あるいは統合、活動拠点の確保など様々な課題を背景として「放課後子どもプラン」が始まるという。前宣伝のとおり真に公立学校に子育て支援活動の拠点機能を担わせることになるのであれば、戦後学校教育システムの最も重要な革新となる。賞讃に値する。学校が地域の教育活動の拠点となることは、学校施設の学校による占有が終り、学校資源の共有・開放を始め、様々な双務的連携に道を開くことになるからである。「放課後子どもプラン」の構想は地域の学校支援と合わせて学校の地域貢献のあり方を問うことになるが、それができれば初めての「融合モデル」に道を開くことができる。しかし、果して「放課後子どもプラン」がいう学社の融合や、社福の融合を行政は実現できるのか？慢性病に

近い学校の閉鎖性や行政の縦割りには打破できるのか？

「放課後子どもプラン」は「プログラムの中身を問う。プログラムを問う以上は、当然、その指導方法も問われる。当然、放課後や休暇中の活動が社会教育／健全育成事業だとすれば、その成果も問われる。必然的に、子育て支援組織と学校との連携も問われる。そこから交流や交渉や相互批判が生まれることであろう。教育の活性化の第1歩が踏み出される。だからこそ難しいのである。厚生部門は「学童保育」の既得権を放棄することに抵抗し、教育行政は労を惜しみ、学校は無関心を通すのではないか？

特に、1970年代以来、女性の就労が増加し、「かぎっ子」が巷に溢れた時代、子育て支援の要請が緊急であったにもかかわらず、自らの学校の子どもにすら、行政システムの分担の違いを盾にして、施設開放を拒否して来た学校と教育行政の「不作為」を打破できるのか？疑問を持っているのは筆者だけではないであろう。「放課後子どもプラン」の可能性も限界も現行の教育、福祉両行政部門の時代認識と実行力にかかっているのである。いじめであろうと子育て支援であろうと問題教員への対応であろうと行政の「不作為」は行政では解決できない。蛮勇を奮った政治家のリーダーシップを願うばかりである。



3A 小学校との訣別—「片思いの失恋」

A 小学校のプロジェクトと訣別した。筆者の学校への「片思いの失恋」であることに気付いたからである。筆者の「恋」は学社連携への恋であり、コミュニティ・スクールへの恋である。長崎県の霞翠小学校のモデル事業に続いて A 小学校の学社連携・家庭教育推進を実現するため、わくわくして顧問の仕事 시작했다。しかし、率直に言って学校は学社連携には興味が無い。学校敷地内で行われている「学童保育」との協働は恐らく考えたこともない。現状の学校には欠損体験を補完する多様な社会教育の手法が不可欠であるが、手法はもとより、新しい実験にも、挑戦にも意欲は薄い。今回の試みには教育事務所が噛んでくれたが、学校は平気で独自スケジュールをきめる。昨年、友人の教育長に生涯学習の大会の講師をお願いしていた時、ある学校が教育長に何の相談もなく50周年記念事業の日程を決めて教育長を拘束したことがあった。当然、教育長の大会出演は不可能になった。恐らく、学校という組織は外部機関との「連携」を配慮する気遣いをしたことがないのである。筆者も先約

を変更して学校のスケジュールに合わせたが、今度は当方からお断りすることになった。かくして、生涯学習施策はいまだ学校への片思いが続いている。校内に2～3人の理解者がいただけでは学校組織は動かない。

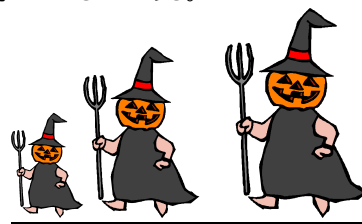
要は現行の学校教育では、教育事務所の「生涯学習課」が噛んだとしても、「学校による」「学校のための」「学校だけをよきようする」「片務的」な発想の枠を破ることはできないのである。それゆえ、社会教育を専門とする筆者の役割は無い。筆者に残された時間も少ない。「片思いの恋」は辛い。当方から学校への未練を捨てて顧問職を辞任した。残念であるが縁が薄かったと断念せざるを得ない。したがって「風の便り」紙上で予告した A 小学校の学校発表会には筆者は関わらないことになった。

誤解のないように付記するが、A 小学校は優れた学校である。運動会の予定演習に付き合ったが、児童の演技は先生方の努力が実って生き生きとしたものであった。保護者の評価も高かったと校長先生からご報告もいただいた。発表会も間違い無く立派なものになるであろう。

しかし、筆者の役割は普通の学校を学校教育概念の枠の中で立派な学校にすることでは無い。「連携」の理念に基づいて、双務的に地域の学校支援と学校の地域貢献を同時に遂行する生涯学習システムとしての学校モデルを提示することである。

しかし、「豊津寺子屋」の実践で学んだように、町長の指導が行われるまで学校は放課後の子どもに施設を開放することすら拒否するのが実態である。当然、「地域貢献」などほとんど考えてはいないであろう。恐らくはその閉鎖的な慣行に鑑み、地域からの学校支援を受け入れることさえ考えてはいない。

学社連携も、学社融合の概念も学校内では未知に近く、死語と同じである。優れた学校であってもそれが実態である。フォーラムレポートで紹介した公民館主事が常駐する福岡県須恵町の「コミュニティ小学校」のシステムなど想像もできないであろう。もちろん、須恵町の「コミュニティ小学校」ですら、社会教育行政が学校施設を生涯学習の視点で共同運営しているだけであって、学校本体はやむを得ず「軒先き」を貸しただけであろう。筆者の「片思い」も、生涯学習の理念倒れも続いているのである。



保護者は何を見たか？

夏学期「豊津寺子屋」保護者調査の集計と分析

今回の夏休み寺子屋アンケートは調査項目は5つ、指導者・実行委員会への自由記述・通信欄を加えて合計6項目で、すべて記入式である。回答率は50.9%であった。回答して下さった保護者からはこと細かく沢山の報告をいただいた。アンケートに記入して下さった保護者に関してはその熱意と感謝が伝わって来て日本の家族の健全性を象徴している。しかし、家庭教育の問題は熱意と感謝だけでは解決しない。寺子屋に限らないが、現在の保護者は見るべきものを見ず、聞くべきところを必ずしも聞いていない。

いくら忙しいとは言え、保護者の中には、時に、迎えに来た時に、「車から子どもを手招きするだけ」で、子どもを引き取る確認も、指導者にあいさつも無い場合がある。寺子屋に子どもを「捨てに来るのではないか」と指導者を怒らせるコメントが出るのもやむを得まい。恐らくは未回答の保護者の中にその種の無関心、人任せの親がいるのであろう。いずれにせよ、幼少年教育の危機は続いている。

1 子どもは「なに」を語ったのか？_保護者への報告事項

(1) 子ども調査の信憑性は低い

子どもの家族への報告は圧倒的に未体験、初体験、困難体験に関する事項に集中していた。したがって、子ども自身が「保護者に対して報告したという報告」と「保護者が子どもから報告を受けたという報告」とは中身がかなり違う。

調査実施時点で、目の前のことに引きづられる子どもの回答の危ういところである。子どもは夏休み全体を見渡し、長期的な記憶・反省に基づいて活動の評価はしない。評価に立ち会った実行委員の観察でも、子どもはアンケートを取った当日のこと、あるいは前日のことを中心に反応する。

前回の子ども評価の報告ではずいぶん手間ひまをかけて集計と分析をしたが、保護者の意見・観察・評価と比べて、子ども調査の信憑性は残念ながら低い。学校教育でも、社会教育でも子どもの感想や意見に依拠してプログラムを組んだり、指導法を変えたりしてはダメだという証拠である。

(2) 寺子屋にも色々なことがあったであろうが、子どもは基本的に「楽しいこと」を報告している。報告は多岐に亘るが保護者の受け止め方は「子どもの熱中」や「子どもの楽しみ」に注目している。極めて健全であろう。「熱中時代」をおくれれば、哀しいことも、辛いことも子どもの心を傷つけることはほとんどない。

(3) 保護者アンケートを見る限り寺子屋のプログラムは「成功」である

一日中遊んでも熱中している子ども達はまだ帰りがたかない。それらは「迎えが早すぎると文句を言われます」とか「子どもはまだ遊び足りないのです」とか、寺子屋は「遅めに迎えにきて！」などのコメントに現れている。寺子屋への百万言を費やした評価に優る子どもの評価である。

(4) 子どもは日常では帰属し得ない異年令集団・異年令の共同生活を楽しんでいる

「みんなでつくって、みんなで食べる楽しさを味わっているのです」。「これまで親の知らなかった沢山の友だちができました」。「年上の子どもと遊べるようになりました」。「班長さんが大好きでした」。

保護者が書き留めて下さったコメントは現代の幼少年期の「欠損体験」を浮き彫りにしている。異年令の集団こそが後の社会の縮図である。異年令の共同生活をくぐることは社会生活の「予行演習」を行うことである。子どもが社会性を体得するとすれば、それは教室や家庭ではない。自然発生的な地域の異年令集団が消滅した今、「予行演習」の「場」は「寺子屋」の遊び型プログラム中にしか存在しない。

(5) 子どもの報告は未体験、初体験、困難体験事項に集中している

報告数が多いのはキャンプ、魚釣りカレーづくりなどである。「キャンプ前日は嬉しくて眠れない」、「お皿を100枚洗いました」、「肝試しは恐かったけれどみんなで行ったから恐くない！」などなどである。聾者の生活体験の話や地球温暖化についての学習への反応など子どものアンケート調査には全く現れて来ない項目であるが、保護者には興奮して報告している様子が垣間見える。「家の電気を消して廻っています」、「地球温暖化の話聞いてコンセンをまめに抜くようになりました」、などのコメントを書き留めてくださった保護者の笑顔を想像している。

(6) 子どもが張り切って報告したのは以下の項目である

(全体は37項目。数字は保護者報告に出て来た回数、回答には複数の事項を含んだものもある。「事項」だけを示したものは報告内容・状況についての説明がなかったもの。省略するのは忍びないが上位5位までを掲載する)

- 1 キャンプ 29
- 2 魚釣り-また行きたいと言っています 20
- 3 カレーづくり 17
- 4 スポーツ/ドッジボール 12
- 5 手話 11

2 「できるようになったこと」はなにか？ -「寺子屋」の指導は成果を生んだか！？-

(1) この質問には「無回答」が多かった。

筆者は、保護者の観察の中に「できなかったこと」が「できるようになった」という視点が欠落しているのではないかという疑問を感じている。主催者の側から見れば、初めは「並ぶこと」も、「話を聞くこと」も、「返事をする事」も、「掃除」も、「あいさつ」も、「後かたづけ」も、時には「立つこと」すらできなかった子ども達を曲がりなりに「寺子屋」の集団活動に参加できるまでに「鍛え上げた」という自負がある。ろくに日本語も読めなかった子ども達に宮沢賢治の「雨にも負けず」も、堀口大学の「夕暮れの時は良い時」も朗唱ができるまでに仕込んだという誇りもある。しかし、それらは必ずしも保護者の意識には登っていない。われわれが子どもの変化に驚いている程には保護者は驚いていないのである。すなわち、調査に回答して下さった保護者ですらも、子どもが当面している問題を問題として理解せず、子どもの危機を危機として認識していない。これこそが現代の家庭教育の危機ではないのか？以下は全体の30%程度の保護者が回答した子どもの「変化」である。

(2) 保護者が認めた子どもが「できるようになったこと」は以下の項目である。

(数字は保護者報告に出て来た回数、回答には複数の事項を含んだものもある。「事項」だけを示したものは報告内容・状況についての説明がなかったもの。全体項目数は37、上位5項目を示す。)

出来てしまえば極めて簡単なことだが、「自分のものを整理整頓するようになりました」、「時間を守るようになりました」、「包丁を使えるようになりました」、「食べられなかったものが食べられるようになりました」、「外出先をきちんと行って出かけるようになりました」等々の変化がこの先の子どもの人生にどれほど重要な変化であるかを果たして保護者は理解したであろうか？

- 1 プールを怖がらず、水泳ができるようになった 7
- 2 手話 6
- 3 靴を並べるようになりました 3
- 4 あいさつができるようになりました 3
- 5 将棋ができるようになりました 3

3 健康管理上の変化に着目したか？ -夏の「寺子屋」を経て「食欲」、「睡眠」、「健康」、「たくましさ」などで変化は見られましたか？-

(1) 多くの「へなへな」は「へなへな」でなくなった

寺子屋は「医者」でもある。子どもは風邪を引かず、

病院通いもなくなった。また、寺子屋は計画外の「食育」機能を果たした。食欲の増進はその一つの証拠である。余さず食べ、好き嫌いをいわずに食べるように

なったのもその証拠の一つである。保護者は時に工夫して、時に楽しんでお弁当をつくっている。子どもは見事に平らげ、夕食についてもよく食べる。寺子屋活動は体力と耐性の形成を中核に置いている。とにかく子どもは動き、集団で数々の体験プログラムに挑戦する。夏の一日を目一杯活動すれば当然腹は減る。その時、「空腹」は最高の調味料であることは疑いない。ここでは比較的多くの保護者が変化に気づき、変化に驚いている。保護者の最大の関心が子どもの健康にあることの証拠であろう。多くの「へなへな」は「へなへな」でなくなったのである。

寺子屋は「生きる力」の向上プログラムを通して体力や耐性をもとより、「生活習慣」をつくり、食育を果し、礼儀を教え、家庭教育の補完をしている。

(2) 保護者が認めた子どもの「健康管理上の変化」は以下の項目である。

(数字は保護者報告に出て来た回数、回答には複数の事項を含んだものもある。「事項」だけを示したもの

は報告内容・状況についての説明がなかったもの。全体項目数は31、上位5位までを示す。)

保護者は子どもの変化を喜んでくださっている。「自分で早めに寝るようになりました」、「兄としてのたくましさが見えるようになりました」、「朝も自分からおきます」、「暑さに負けませんでした」、「お弁当も残さずたべます。うれしかったです」、「弁当箱を大きくしました。家では食べないものも全部食べます」、「間食が減りました」、「おやつなしで夕食をきちんと取るようになりました」などはその具体例である。

- 1 「変化」は特になかった 14
- 2 昼夜ともに良く食べるようになりました 6
- 3 お弁当の量を日に日に増やしました 3
- 4 良く食べ、良く眠り、夏風邪もひかず元気に過ごしました 3
- 5 食欲が出て、体力がつき、夏ばてもありませんでした 3

4 寺子屋が重視した「社会性」:「生活態度」、「生活習慣」の変化は見られたか?

(1) 子どもの社会性は日々の「態度」と「習慣」に現れる

寺子屋は「型」の指導を重視している。未熟な子どもに説明しても社会のルールや約束の重要性は理解できないことの方が多い。それゆえ、基本的な生活習慣は「態度」や「行為」の型として指導している。基本的な生活習慣の確立は「体力」、「耐性」に続いて、寺子屋プログラムの第2の目標である。しかし、ここでも寺子屋の指導体制と保護者の皆さんの受け止め方との間には微妙なズレが生じている。「何もできなかった子ども」は様々な角度で社会性を身に付けているが、そのことについての保護者の注目度は必ずしも高くない。社会性の開発が子どもの将来に及ぼす重要性についての認識も今一つ軽い。アンケート用紙が帰って来ない家庭はもとより、回答された家庭に置いても「特になかった」が3分の1を占めた。それが事実であれば、寺子屋プログラムの「敗北」であるが、筆者は保護者の側の観察視点の欠落ではないかと心配している。

実際問題としては、保護者が忙しすぎて記入式のアンケート調査が面倒であったということもあるだろう。しかし、設問は子どものことであり、進行中の夏休みプログラムのことであり、設問はわずか6問である。

また、寺子屋の指導が浸透していない子どももいるであろう。寺子屋と家を使い分けている子どももい

るであろう。しかし、1日10時間に亘って毎日実践した行為と態度は何処かで子どもの日常に反映するはずである。家庭は果して見るべきものを見ているであろうか? こうした疑問が「分析者」の誤解に終われば幸いであるが、ここにも家庭教育の潜在的危機を感じている。

(2) 保護者が認めた子どもの「生活習慣の変化」は以下の項目である

(数字は保護者報告に出て来た回数、回答には複数の事項を含んだものもある。「事項」だけを示したものは報告内容・状況についての説明がなかったもの。全体項目数31、上位5位までを示す。)

夏休みの初めとおわりでは子どもは大きく変わっている。関係者が保護者に観察していただきかけたことは次のような変化である。「自分のことは自分でするようになりました」、「整理ができるようになりました」、「食事をきちんと食べるようになりました」、「やさしくなりました」、「表情がいきいきしていました」、「落ち着きが出てきました」、「規則正しい生活をするようになりました」、「時間のけじめをつけるようになりました」。子どもにこうした変化があらわれれば、「期間中に宿題が終る」などということは当たり前なのである。

- 1 特になかった 18

- 2 早起きができるようになりました 6
- 3 靴をそろえて上がるようになりました 3
- 4 弟の世話ができるようになりました 2

- 5 返事をするようになりました 2

5 「寺子屋」は家族の役に立ったのか？

(1) 寺子屋は子育て支援と男女共同参画の条件整備の同時遂行である。

(数字は保護者報告に出て来た回数、回答には複数の事項を含んだものもある。「事項」だけを示したものは報告内容・状況についての説明がなかったもの。全体項目数32、上位10位までを示す。)

回答して下さった保護者の中に「役に立たなかった」というコメントはなかった。以下のコメントの通り寺子屋は子育て支援と男女共同参画の条件整備の同時遂行である。さらに、指導にあたった熟年の皆さんの心身の活力や生き甲斐の保持・存続に役立ったとすれば、寺子屋方式のプロジェクトこそが「少子高齢化」―「男女共同参画」問題の解決処方である。

保護者の評価は寺子屋の意義を浮き彫りにしている。実行委員会を始め関係者は自信を持っていいであろう。保護者が認めた「寺子屋機能」は以下の項目である。

- 1 だらだらした夏休みにならなかった:規則正しい生活が出来ました 9
- 2 家族や子ども同士だけでは得られない体験を得ています 9
- 3 安心して仕事できました 6
- 4 何より子どもが楽しんでます 5
- 5 お陰さまで仕事に集中できました 5
- 6 家が留守になる事情があったので本当に助かりました 3
- 7 子どもも楽しそうで、私も安心して仕事に行けました 3
- 8 安全で安心して預けました 2
- 9 預けるところと学べるところが同じだということがすばらしい 2
- 10 共働きを助けて頂きました 2

6 自由記述:意見・提案

自由記述の大半は寺子屋のシステム及び指導者の皆さんへの謝辞が並んでいる。礼儀正しい日本文化は決して死んではない。「宿題・勉強をもっと指導すべき」である、というような寺子屋の趣旨を履き違えた注文もあったが、総じて提案は前向きであった。ここでは「子どもの様子」、「指導原理」、先生方への「特別コメント」などを重視して紹介したい。(全体項目数は32であったが、10項目だけを例示したい。)

- 1 指導者の励ましと賞讃とけじめのある指導に感謝しております
- 2 「明日は何をするかね」と計画表を見て寺子屋へ出かけます
- 3 親身に「親代わり」をやって頂き感謝申し上げます
- 4 指導の内容と方法に共感しています
- 5 色々な先生方と顔見知りになって本当に良かったと思います

- 6 朝の8時が待てない様子でした
- 7 友だちの顔を蹴るなど考えられません。そのような子どもはその日限りで止めてもらいたいです
- 8 別の町の「学童保育」の話を聞き改めて「寺子屋」の良さを知りました
- 9 子どもは先生方の特技や智恵を尊敬しています
- 10 指導に従わなかった場合はバシバシ叱ってやってください





MESSAGE TO AND FROM



お便りありがとうございました。今回もまたいつものように編集者の思いが広がるままに、お便りの御紹介と御返事を兼ねた通信に致しました。みなさまの意に添わないところがございましたらどうぞ御寛容にお許し下さい。

★福岡県築上町 雨宮一正 様

この度のハンガリー動乱50周年の記念彫刻の制作誠にお見事で拍手喝采、お喜び申し上げます。中嶋敦の李陵のように、見ている人は見ている。見ている人がいなくなっても天は見ている、を思い出しました。先生の生きて来られた道程が歴史になった瞬間を感じました。己に対して「まだ捨てたものではない」と言い続けることが生涯現役の誉れであることを遠く学ばせて頂きました。

こちらも近所の稲刈りがすべて終わりました。季節は急ぎ足になって一気に晩秋へ向かうのでしょうか。寒田の谷は日の入りが早くなったことでしょうか。地名から想像しても冬の寒田は淋しさが身に滲みるように遠いですね。みんなで誘いあって「なべ料理」の準備をして伺いたいと思っております。

★東京都 福原洋子 様

お便りありがとうございました。なれない土地での新しい仕事ごろうさまです。若い頃は雑踏の中に埋もれること、見知らぬ他人の中でnobodyになることが

好きでしたが、あなたはいかがでしょうか？生まれたばかりの子犬を膝に抱いて執筆する日々が続いています。すべてに幼く、保護者のわれわれに依存している無力な生き物を見ていると、理不尽な児童虐待や、いじめのニュースに怒りを感じざるを得ません。虐待もいじめも人間の常ですが、それらの不幸を見過ごしにすることは、学校や行政が使命感を失い、怠惰に陥った「不作為」の結果なのでしょう。何の因果か、偶然にも、そのような状況のそのような場所に居なければならなかった子どもの不幸な運命を感じざるを得ません。学校も行政も子ども観を間違っており、いじめや虐待を抑止する「心理的風土」の形成に失敗しています。いじめたら「ただではおかない」という厳しい指導の空気が存在すれば、それだけで虐待もいじめも半減するのですが、見てみぬ振りの怠惰と無責任がこの国に蔓延したということでしょう。処方の基本は「半人前」の「未熟さ」を放置し、子どもの「主体性」を「教育の絶対善」とする「児童中心主義」思想の抜本的革新ですね。死なねばならなかった子どもの無念を他所に、「いろいろ裏の事情があるのですよ」などというコメントを聞くと、「ひとの痛いのなら3年でも辛抱できる」人間の業を思わざるを得ません。2月の山口大会のチラシを別送します。

第72回生涯学習フォーラムお知らせ

事例発表／研究 「稼ぐ生涯学習施設—源じいの森の運営原理」

福岡県赤村 源じいの森 館長 太田 伝 さん(交渉中)

論文発表 未定

日時：平成18年11月18日(土)15時～17時、

研究会終了後、センターレストラン「そよかぜ」にて夕食会を予定しています。どうぞご参加ください。

場所：福岡県立社会教育総合センター

会場その他準備の関係上、事前参加申込みをお願い致します。(担当：朝比奈)092-947-3511まで。

■■ 編集後記：「風の便り」2007年号の登録について ■■

11月になりました。早いものでまた1年が巡りました。「風の便り」も82号を迎えました。1年区切りの購読更新の季節になりました。

2006年度を半分生き抜きました。今年は年頭より2007年問題への挑戦の年にしようと考えました。2006年度が終る頃には、2007年問題の処方箋を1冊の書物にして世に問いたいと願っています。筆者も年を取り、研究とは別に、筆者の生き方が2007年問題への具体的な答になるとも予想しています。口ほどにもなく、老いぼれて朽ち果てるか、それとも衰え行く心身をなだめながら多少は世の中のお役に立ち続けることができるか？「読み、書き、体操、ボランティア」と「標語」風にまとめましたが、生涯学習と生涯スポーツの中にその答があると信じております。

今年は2冊の書物を世に問いました。『子育て支援の方法と少年教育の原点』と「市民の社会参画と地域活力の創造」(いずれも学文社)です。

来年も多くの方々のご支援のおかげで、「便り」の購読料は無料で続ける事ができます。引き続き購読をご希望の方は2007年分の郵送料または90円切手12枚を同封の上事務局までお送り下さい。この度もメッセージカードを同封しますので、送付先の変更、ご意見、感想などご自由にお寄せ下さい。ご承知とは存じますが、アメリカの藤本 徹さんのお力添えで定例の生涯学習フォーラム「参加論文」と「風の便り」を共にオンライン化しております。末尾にホームページのアドレスも記しております。合せて御利用下さい。

昨年は自分なりの結論が出ました。

貧乏に耐え、戦禍に耐え、粗衣粗食で働き続けた戦前、戦中の「タフな世代」が見るも無惨に衰えたのは、

「安楽」や「閑」を求めた「余生」論と施策のためではなかったか！？文学者は最後まで書き続け、農夫は田畑で死に、商人は商用の途中で病いに伏し、講演者は壇上に倒れる。それが可能ではないサラリーマンの定年者はボランティアを見つけて世の中への貢献を続けるべきなのです。それゆえにこそ、日本型勤労奉仕のボランティア「ただ」論は極めて「有害」なのです。われわれが社会への貢献を止めずに頑張った時にのみ老後の「安楽」や「閑」の意味も分るのです。生涯学習、生涯スポーツはますます必需品となることでしょう。お陰さまで私の現在は心身共に快調であります。「風の便り」は小生の気力・体力の続く限り、勉強を続け、執筆を続ける覚悟ですが、如何せん「老い」はなん人もとどめる事の出来ぬ「衰弱と死に向かったの降下」に外なりません。今後は、我が身に人生の「無常」の風が吹くことを予想し、万一の場合の措置を読者の皆様に御了解いただいおかねばなりません。書き手に不慮のことが起った場合は、執筆を中断せざるを得ず、いただいた郵送料の義務を果たす事が出来なくなります。そうした非常の際を想定して今後は『ごあいさつの遺書』をしたため最終号に掲載の準備をしておきます。

また、その際、こうして前の年にまとめていただいた郵送料や残りの切手はこの世の旅出のはなむけとしてありがたく頂戴いたしますのであしからず前もってお許しを乞いたいと存じます。今年もまた、筆者の覚悟とお願いをご了承の上、更新の手続きをお願い申し上げます。

* 事務局の旧住所をお使いの方が時々おられます。転居いたしましたのでご訂正下さい。12月以降は郵便局の転送がなくなります。

■■ 編集後記：男と女の一行時（山陽小野田市）と女性に尋ねた矛盾の現状（福岡県みやこ町） ■■

合併後の福岡県みやこ町で男女共同参画問題についてささやかな「聞き取り調査」を行い、その結果に基づいて議論の一步を進めた。丁度時を同じくして山口県下関市の海峡メッセを中心に「日本女性会議」が開催された。山口の皆さんと会場を見学していたら山陽小野田市が実施してきた公募による「男と女の一行時」の巨大パネルに遭遇した。印象の強かったものをメモしてきたら、当然ながら、みやこ町の調査結果と重なるところが。語呂も良く、粋な表現で問題の核心を突いている

ので思わずペンを取った。さびしい結論だが、男女共同参画の一番の解決策は「時間」であろう。伝統とときたりから自分を解き放つ事のできない熟年世代が死に絶えれば、男と女の対等な協力も大いに前進するであろうという感想になった。変革期に引きずっている伝統は男も女も多くの人々を不幸にするのである。

矛盾を感じる男女の社会的役割(みやこ町調査-協議-抜粋)

■1■ 「性役割分業」は明らかに存続している。家庭でも、地域でも、職場でも「性役割分業」は伝統やしきたりとして定着している。しかも、伝統もしきたりも半分は女が担っている。

- (1) 家事に参加する男を社会がバカにする
- (2) 話し合いの場でも「女の意見」は誰も聞かない
- (3) どんな場合も男性優先—それが当然ということ
で社会が成り立っている
- (4) 女は常に「裏方」である
- (5) 男性が決定し、女性が従うという文化があり、女

性は自分を控える（以下略）

失礼ながら、自分の無力を棚に上げなければならぬが、しみじみ女でなくて良かったと思ひ、田舎に住んでいなくて良かったと思うのは筆者一人ではあるまい。

■2■ 男と女の一行詩

- あなたにとっての日曜日、私にとっても日曜日（山口県宇部市 本吉 都）（わたしものんびりしたいのです！）
- 母がいなくて寂しがる父、父がいなくて喜ぶ母（山口県徳山 松中陽子）（おっさん！わかるかね？この事

実！！）

●「おーい」には応えぬ妻の構造改革（佐賀市 原俊一郎）（その程度の抵抗で男はかわらないよ！！）

■3■ 男女共同参画は世代のズレが大きい。若い世代は「対等」の関係に進んでいる。共働きは男女を協力的にした

- エプロンが行ったり来たり新所帯（東京都豊島区 直地俊一）（だから家庭科の男女共習は大事なのだ！）
- 父がいるから出かけられない母、夫がいるから出かけられる私（さいたま市 小山美佐江）（熟年妻は気の毒とは思いますが、同情はできない！）

●パートはそれぞれ違うけど、家でも、町でも、職場でも僕らは混成で歌ってる（神奈川県藤沢市 福島敏朗）（多くの点で若者世代はなっとらんが、男女の対等だけは熟年世代がなっとらん！！）

■4■ 男女共同参画は「女性の就労」が核である（委員会提案）

多くの職場に女性の不満がある。家事や育児が女性に偏っていることも女性の就労を難しくしている。その偏りを正す社会システムは十分に整ってはいない。

●三角（参画）、四角（資格）、五角（互角）と進み行き、世の中だんだん丸くなる（那覇市 川口ひとみ）（対等の基本条件は女も資格を得て、互角に「かせぐ」ということになるか！）

■5■ 男女共同参画の着手は『役場が手本を示す』ところから（委員会提案）

女性の社会的役割についても、意志決定過程における男女比のアンバランスについても、お茶汲みに象徴されるような「性役割分業」の是正についても、まずは「役場が手本を示せ」という意見が多く出た。その役場が

どうしようもない時はどうする！？

まさに「お上」の風土である。この点についての一行詩は見つけられなかった。

【編集事務局連絡先】（代表）三浦清一郎 住所 〒811-4177 宗像市桜美台 29-2

TEL/FAX 0940-33-5416 E-mail sdmira@fj8.so-net.ne.jp

【風の便りの購読について】 購読料は無料です。ただし、郵送料の御負担をお願いしております。

【編集事務局連絡先】まで 下記の 切手 または 現金 をお送り下さい。

*11・12月号+2007年1月号～12月号をご希望の方： 90円切手 14枚 または 現金 1260円

*更新 2007年1月号～12月号をご希望の方： 90円切手 12枚 または 現金 1080円

【オンライン「風の便り」】 <http://www.anotherway.jp/tayori/>